

「ポリオ撲滅に殉じた二人の日本人ロータリアン」

20年の年月をかけ、ロータリーにとって、初めての地球規模の財団プログラムが全世界のロータリアンの協力を得て終結しようとしています。

このポリオ撲滅という世界的な大事業の達成を目前にしにして、世界中から賞賛されている、「ポリオプラス活動」は、ロータリー財団の誇るべき活動であります。

しかし、その重要性をはじめて国際ロータリーに説き、自ら率先して現地でのワクチン投与活動に活躍され、広く募金を呼びかけ、ロータリー財団の大きなプログラムとして組み入れ、この計画の推進に、命をかけて献身された当地区のロータリアン山田ツネ（東京麹町 RC）さんの偉大な足跡と、山田さんと共に活躍された峰英二（東京麹町 RC）さん、そして、お二人の後を受けて、活躍された沖縄・那覇西 RC の二人のロータリアンについてご紹介しようと思います。

山田ツネさんについて、私がお話しすることは身びいきになるやに思われ、懸念しておりましたところ、幸いな事に、先ごろ他地区である 2660 地区の戸田孝 PG が「ポリオプラスに命をかけたロータリアン山田ツネさんに学ぶ」と題して月信に紹介されていました。戸田 PG のお許しを得ましたので、その文章を引用しながら山田さんの足跡をご紹介したいと存じます。

国際ロータリーは 1978 年の東京国際大会において、3H プログラム（保険、飢餓追放、人間性回復）を発表し、1983～88 年にポリオ・プラスプログラムに発展、創立 100 年にあたる 2005 年までに、ポリオを地球上から撲滅する計画を決定しました。

ポリオの撲滅は、全世界の幼い子供を持つ親たちの強い願いであったのです。このポリオ撲滅という壮大な計画を発足させるきっかけを作ったのは、日本人であり、当 2580 地区のロータリアンであったのです。そのロータリアンこそ、山田ツネさんなのです。

ロータリー財団管理委員長カルロス・カンセコ氏は、正式の文書のなかで、次のように述べています。「私はボランティアたちによる一つの奉仕プロジェクトから、また新しい奉仕プロジェクトが生まれたことを実際に見ています。東京麹町ロータリークラブの山田ツネさんは、1981 年からハシカの免疫プロジェクトを監督するために、ボランティアとしてインドに行きました。その経験を生かし、このボランティアはポリオ免疫プロジェクトを発足させてきたのです。」と述べておられます。

戸田 PG と山田さんの出会いは、1986 年、に続き 87 年の国際協議会にグループリーダーとして参加した時であります。この年度の協議会は特別のものであります。「長期間の準備を終えて、この年度からポリオ計画の募金活動が始まったのである。朝 9 時から 5 時までの部門別のセッションを終え、夕食後 7 時から 11 時まで日本語グループでのポリオ

計画の説明が2回にわたって行われました。説明者はインターナショナル・コーディネーターであった山田ツネさんで、彼の経験に基づいた詳しい説明と具体的な募金方法、そして質疑応答などが行われ、参加者全員が始めて耳にする壮大な計画に、果たして成功するかどうか誰もが不安を覚えたものでした。

山田さんは、ポリオ免疫プロジェクトを始めることになった動機を次のように話しています。「私がインドへ行ったときのことです。夜遅くまで続いた会議の帰り、ギョッとして立ち止まった。ガサガサと音がしたのです。犬か猫が餌をあさっているのかと、音の方向を凝視した時、月の明かりで私が見たものは、芝生の上をやせ細った少年が、手と肘を使って這っている姿でした。それは、今思い出しても胸が締め付けられるような痛々しい光景でした。多分幼い頃にポリオにかかり、足が麻痺してしまったのでしょう。この少年の姿を見たとき、私は、南インドの子供たちを日本人の手でポリオから救いたいとの思いが生まれたのです。」

山田さんは、1981年からボランティアとして、インドのハシカ免疫プロジェクトである4週間の奉仕活動に従事されました。その経験を生かして翌年、南インドのポリオ免疫プロジェクトを推進され、近隣13クラブの共同奉仕として活動の巾を広げ、更に東京地区の100以上のクラブの協賛を得て、奉仕の巾が更に大きくし、効果も上がってまいりました。

山田さんは講演の最後に「世界は急速に変わっています。人間が月へ旅行できること、他人の臓器で生命を救うこと、生活水準の向上など・・・、しかし世界の子供たちはみんな健康で幸福に育っているのでしょうか？ 日本や先進国は恵まれています、しかし、発展途上国では想像もつかないほど悲惨な状態が続いています。どうか、皆さんの手で発展途上国の子供を救ってあげてください！お願いします。」と目に一杯涙をためて、深々と頭を下げて話は終わるのであります。参加者の拍手はいつまでも鳴り止みませんでした。

(参考までに、RIは1986年7月から向こう5年間の継続事業として募金活動をする異例の決定をしました。その内容は5年間に亘り地球上からポリオ、ハシカ、ジフテリア、結核、百日咳、破傷風などの撲滅を願い1億2千万ドル(約200億円、日本担当分40億円)を目標として募金キャンペーンを実施することでありました。

1991年6月募金総額は2億1732万ドルに達し、当初の目標をはるかに超えて、このキャンペーンを終了しました。日本での募金総額は48億9856万8628円に達したのであります。)

山田さんの次の年度の地区世界社会奉仕委員長を勤められた同じ麹町RCの医師でもある峰英二氏は、常に山田さんと一緒に、南インドでのワクチン投与の奉仕活動に従事され、度々インドに行かれ、活躍されました。

その山田さんは1988年7月12日に、東京麹町ロータリークラブ会長在任中に病に臥

され、その後間もなく逝去されました。享年64歳。病名は定かではありませんがインドでの風土病とも言われています。

一緒にインドで活動された同僚の峰英二氏も山田さんの後を追うように、1989年6月9日に病没されました。享年69歳。

このお二人は、まさにポリオプラス活動の世界的規模の運動への発展の原動力・推進力となり多大の貢献をなされました。お二人は、目的達成を目前にした現在のこのプロジェクトの状況をどのように見ておられるのでしょうか？目的達成の報告を受けた時には、直ちにお二人の墓前にその報告に伺いたいと思っております。

このお二人の後を受けて地区の委員長を勤められ、現地での奉仕活動に邁進された、沖縄那覇西RCのお二人のロータリアンについても、ご紹介しなければなりません。

大宜見斎さんと大仲良一さんです。お二人は、山田さんの強い要請を受けて、この活動に参加され、山田・峰両氏亡き後も積極的にこの活動を続けられました。特に大仲さんは山田さんの念願でもあり、懸案でもあった、医学生への奨学制度を創設されました。

P.S.G医科大学（インドケララ州ウランバートル）に1989年大仲基金を設立され、毎年多くの医学生に奨学金の恩恵を与えております。

当地区の誇るべき先輩ロータリアンの偉業の一端をご紹介いたしました。

山田さん、峰さんのお二人の活躍を追悼して、「思い出草」と題した追悼録が麹町ロータリークラブから1994年に出版されました。

また、大宜見さん、大仲さんの活動の記録は那覇西ロータリークラブの世界社会奉仕活動の記録として纏められております。

本日、入り口のブースに展示しておりますので、是非ご覧いただきたいと思っております。